

Title	Continuous subcostal oblique transversus abdominis plane block provides more effective analgesia than single-shot block after gynaecological laparotomy
Author(s)	前田, 晃彦
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51921
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論 文 内 容 の 要 旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	前田 晃彦
論文題名 Title	Continuous subcostal oblique transversus abdominis plane block provides more effective analgesia than single-shot block after gynaecological laparotomy (婦人科開腹術の術後鎮痛に持続肋骨弓下腹横筋膜面ブロックは有効である)
論文内容の要旨	
<p>〔目 的(Purpose)〕</p> <p>開腹術後の管理において十分な鎮痛は、排痰と深呼吸を可能にするため呼吸器合併症の予防に必要である。また適切な鎮痛は早期離床および経口摂取再開を可能にし栄養状態の改善に役立つ。これらの点で鎮痛が術後回復に与える影響は大きい。</p> <p>近年は抗凝固薬や抗血小板薬の周術期投与を必要とする患者が増え、硬膜外麻酔を行えない事例が増えた。一方で、重篤な合併症の頻度が低い末梢神経ブロック (PNB) が代替鎮痛法として関心を集めるようになった。腹横筋膜面 (TAP)ブロックは腹壁の創部に鎮痛効果をもたらすPNBの一つであるが、現在は局所麻酔薬を単回注入するもの(単回TAPブロック)が主流でありその効果持続時間は限られる。またカテーテルからの持続注入(持続TAPブロック)の報告はまだ少ない。我々は婦人科開腹術の術後鎮痛に単回TAPブロックおよび持続TAPブロックを行い、鎮痛効果を比較した。</p> <p>〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕</p> <p>単回TAPブロック (S) 群または持続TAPブロック (C) 群のどちらかに患者をランダムに割り付けた。S群の症例では手術終了時にレボピバカインの単回注入によるTAPブロックを行った。C群の症例では手術終了時に単回TAPブロックを行った後に神経ブロック用カテーテルを同部位に留置し、術後レボピバカインの持続注入を行った。術後に両群とも持続静注フェンタニル(麻薬性鎮痛薬)およびフルルビプロフェン(非ステロイド性消炎鎮痛薬)の併用鎮痛法を行った。主評価項目は術後6・15・24時間後のVisual analog scale (VAS)で評価した安静時および体動時の疼痛の強さとし、副次評価項目は離床開始時期、術後24時間のフェンタニルおよびフルルビプロフェンの消費量、嘔気嘔吐の有無とした。</p> <p>術後24時間後の体動時VASはC群 (n=37) がS群 (n=38) に比べ有意に低かった (49.0±23.2 mm および 63.9±19.9 mm, P = 0.004)。離床開始時期は持続群が単回群より有意に早かった (P=0.03)。その他の評価項目については有意差を認めなかった。</p> <p>〔総 括(Conclusion)〕</p> <p>持続TAPブロックは単回TAPブロックに比べ、24時間後に良好な体動時の鎮痛をもたらし早期離床を促したと結論づけられる。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

論文審査の結果の要旨

(申請者氏名)		前田 晃彦 (申請者氏名)	
論文審査担当者	(職)	氏 名	(職)
	主 査	大阪大学教授	藤 野 裕 士
	副 査	大阪大学教授	木 下 正
	副 査	大阪大学教授	野々村 祝夫

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨

腹横筋膜面(TAP)ブロックは硬膜外麻酔の代替案の一つとして腹部手術の術後鎮痛に用いられるが、現在局所麻酔薬の単回注入(単回TAPブロック)による方法が主流であるため、その鎮痛効果持続時間が限られる点に課題がある。この研究では婦人科悪性腫瘍開腹術の術後における単回TAPブロックおよびカテーテルを用いた持続TAPブロックの鎮痛効果を比較した。その結果、持続TAPブロックは単回TAPブロックに比べ術後24時間後に良好な体動時の鎮痛をもたらし、早期離床を促すことを明らかにした。硬膜外麻酔が施行できない患者の術後回復の質を改善する可能性が示唆され、意義のある内容であったと考えられる。よって上記の者は学位の授与に値すると思われる。